

秋水通信

第22号

2017.5.14

幸徳秋水を顕彰する会
四万十市右山五月町 8-22
四万十市立中央公民館
TEL0880-36-2778 (田中)
HP:<http://www.shuusui.com/>
mail:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

命名 秋水桜

遅かった今年もやっぱり満開に花を咲かせてくれました。

正福寺にある幸徳秋水墓の真上には、隣接する裁判所庭から塀越しに桜の大木が枝を伸ばしています。

明治四十四年四月(旧暦)、秋水処刑から三か月後、盟友堺利彦は秋水墓を訪れ、次のような歌と句を残しています。

行春の青葉の桜に鶯の啼きしきる処
君が墓立つ
行春の緑の底に生残る

同じ桜の木だったかどうかはわかりませんが、いまでは非道な裁きを詫び悲しむように秋水を抱きかかえ、涙の



秋水墓と秋水桜

花びらを散らしています。この恩讐を超えて咲く桜はいつものからか秋水桜と呼ばれています。この桜を正式に秋水桜と名付けることを顕彰会役員会で決め、その命名式を兼ねた「秋水桜を観る会」を四月六日開きました。

まだ五分咲きでしたが、小雨降る中、この桜の下に会員だけでなく、市内短歌、俳句の会からの参加もあり、即興で歌や句をつくり、秋水をしのびました。

俳句の世界で「秋水忌」(一月二十四日)が厳寒期の季語のようになっているのと同じように、「秋水桜」が世の中に平和と春を告げる象徴となり、多くの人たちに親しまれることを願いたい。

秋水桜とはいみじき名花の雨(昭男)
秋水の墓碑守る花に集いけり(同)



正福寺墓地

坂本清馬墓 説明板設置

今年一月十五日(秋水墓前祭九日前)は坂本清馬四十二回目の命日でした。この日、顕彰会では正福寺にある清馬墓に説明板を設置した。

坂本清馬(1885~1975)
父は中村の人で室戸生まれ。海南中、高知二中を中退し上京。秋水の思想に共鳴し、たびたび同居。大逆事件に連座し、1911年死刑判決を受けるが、無期懲役に減刑。1934年出獄。戦後は中村に住み、事件最後の生き残りとともに再審請求の訴えをこすも棄却された。

清馬墓は秋水墓と同じ並びの裁判所塀際、秋水桜の真下にある。昭和五十二年命日に、大逆事件の真実をあきらかにする会、中村地区労働組合協議会、坂本清馬翁を追悼する会の三者で建立した。

同じ大逆事件犠牲者でありながら、秋水には大きな説明板が立っている。しかし、清馬のものはいまだなかつた。このため、全国から秋水の墓を訪れる人で、すぐそばに清馬墓があることを知る人は少なかつた。

清馬は再審請求裁判を起こしたことで、事件が風化し闇に葬られてしまうのを防いだ。このことの意義は大きい

にもかかわらず、地元でも清馬は秋水の陰に隠れていた。

二年前、清馬没後四十年にあわせて、秋水墓前祭を初めて清馬との合同祭とした。今後も五年に一度を目安に合同祭にすることになっている。

今回は、墓説明板だけでなく、墓地入口に建てている誘導板二枚も二人連名に変えた。師の秋水と対等の扱いになったことで、本人は秋水門人と自称していただけに、敷居が高いと思っ

ているかもしれない。しかし、そんなことはない。あなたは、秋水と同等の扱いを受けて当然である。胸を張って師と並んでほしいと、言っ

てやりたい。説明板設置にあわせて、墓石も水洗いし、文字も白く塗り直したのです。きり見やすくなった。

秋水墓参の方は、ぜひ清馬墓にも手を合わせていただきたい。

秋水桜清馬の墓に花こぼす(文鳥)



清馬墓と説明板

幸徳秋水刑死一〇六周年墓前祭 記念講演

田岡嶺雲と幸徳秋水

土佐史談会会員 別役佳代

一月二十四、秋水墓前祭において行った記念講演会要旨は以下の通り。於、市立文化センター大会議室、約六十名参加。(要旨は本人)。



田岡嶺雲

昭和五、六十年代、尾崎驍一氏、威能勉氏、市川敦子先生にご教示いただいたご縁を中村に感謝し参りました。

さて、高知生まれの田岡嶺雲と中村出身の幸徳秋水。共に相次ぐ筆禍で下獄も経験しながらも、権力に抗し真実を求め正論を貫き、時代を超えて読み継がれる名著を遺した。生来病弱で、不幸短命だったことも似通う。

血気盛んな少年期、高知市内の病院で呻吟した二人。秋水は明治一九年に本町の自然堂病院に肋膜炎で入院。嶺雲も重篤な胃病で堀端の県病院に翌二十年から入院。病癒えた秋水は同年夏に中村の家を出、高知経由で東京へ。嶺雲は二三年正月に家人を説得し上京。共に抑え難い向学心があった。秋水の漢詩「丁亥歳遊学于東都出郷作」は、

幡多の夏風景に少年の雄志が爽やかだ。実際に相知ったのは、明治三十年「万朝報」時代。欧米の蚕食する中国・朝鮮を含む東アジア情勢への危機感と提言、キューバ・フィリピンをめぐる米西戦争への義憤に見る対米観、日英同盟への危惧、政府介入の歪んだ教育界への苦言、後年の板垣退助の変節への痛烈な論評など共通点も多い。

秋水の「週刊平民新聞」時代、岡山「中国民報」主筆だった嶺雲は、森近運平の呼びかけで、平民新聞読者会「岡山いろは倶楽部」に参加。寄稿協力も。嶺雲が最も社会主義に接近した時代だ。なお森近は、明治四一年初夏、秋水を中村に訪問。公会堂での講演会は町始まって以来の大盛況を呈す。地元学生たちとも談論、彼らとの生気みなぎる記念の写真が残る。

時移り、赤旗事件後、厳しき増す言論弾圧と監視、離間中傷による孤立、自身の病状への悲観・焦燥から秋水は漸進主義を否定、過激に傾く。その漢詩にも見られるように佐倉宗吾や安重根ら義民義士への共感もあった。大義のため命を懸けた赤穂義士や幕末の生野義挙を例に引き、「良き死に場所」を繰り返し説く秋水。尊敬してきた先輩の言に煩悶しつつもついに決意し森

近は四二年三月、老親妻子の待つ岡山に帰り高等園芸に取り組む。捕縛前夜、湯

河原の天野屋で同じ湯に浸りながら、翌朝の上京を嶺雲に告げた秋水。翌日、門川の交番で別

れるとき聴いた秋水の最後の「さよなら」を、その音容を書き留めた嶺雲。彼もまたその思想が裁かれても不思議ではなかった。四二年十月刊『明治叛臣伝』総叙の「謀叛あつて時勢は躍動する」「謀叛の連続が即ち進歩である」との嶺雲の至言は、同月末の伊藤博文暗殺事件とともに、大いに秋水を刺激し鼓舞したはずだ。

ある意味、「良き死に場所」を得た幸徳秋水。その名は永遠に残るだろう。だが、なぜ偉人幸徳秋水は、大逆の企てを戒めなかったか。なぜ黙認したのか。なぜ無実の明らかな被告を救うべく死力を尽くさなかったのか。(全くしなかつたわけではないが。)

母を懐う名詩「七十阿嬢泣倚門」を私は愛する。しかしながら、獄中、我が漢詩を捻るよりも、遺著『基督抹殺論』執筆完成を急ぐよりも、優先すべきことがあったのではないか。その思いゆえ、『基督抹殺論』だけは、私は納得できないのです。



秋水墓前祭

今年も約七十名参加。例年この日は寒い日になり、今年も前日にはままとまった雪が降ったが、この日はちらつく程度でおさまってくれた。

最初に久保知章会長があいさつ、追悼の言葉を述べたあと、幸徳家縁者から順次献花。

スピーチは、稲村知さん(姫路、縁者)、木戸秀雄さん(地元、木戸明ひ孫)、岡村正弘さん(高知市自由民権友の会の三名。それぞれ、秋水への思いを語った。

今年も直前に、秋水墓をはじめ俵屋幸徳家先祖および、坂本清馬、師岡千代子など、まわりの墓すべてを水洗いしたので、見違えるようにきれいになった。秋水もさっぱりしていることだろう。

全国からみえる多くの方々にも、気持ちよく墓参をしてもらえることだろう。



秋水の師 中江兆民小伝

尾崎 清



中江兆民

めた兆民だが、すぐに上司と衝突して退職、以後は学者、著述家、自由民権運動の理論的指導者として、民間人に徹して生きた。

学者としての兆民は、帰国後すぐに仏学塾を創設。フランス流の自由主義、民主主義を普及するための拠点とした。仏学塾の名声は全国に及び、入塾者は延べ二十人に達したという。

秋水は書生として兆民に学んだが、弟子中の麒麟児といわれる存在だろう。

兆民は、著述家としては先にあげたルソーの社会契約論の漢訳「民約訳解」、また「三酔人経綸問答」は名著として今に知られている。さらに、「東洋自由新聞」や自由党の機関紙「自由新聞」でも健筆を振るった。

また、自由民権運動の二大勢力、自由党と改進黨の提携を後藤象二郎らと計ったり、衆議院議員になったりと政治活動も行った。

のちに兆民は実業界に転じ、北海道で様々な事業を起こしたが、これらはことごとく失敗している。理論家肌の兆民は、経済活動には向かなかつたようだ。

一方、兆民は奇行で知られ、人ともいわれた。印半天を羽織って演説したり、深紅のトルコ帽を被って街を歩いたりしたという。

五十を過ぎてから喉頭ガンを患った

兆民の最後の輝きは、その著「一年有半」が大ベストセラーになったことだ。この原稿は、死期を悟った兆民が、秋水に死後の出版を頼んだものだったが、秋水が「すぐに出しましょう」と出版の一切を段取り発行されたものだった。晩年は世間とやや迂遠になっていた兆民にとって、思いがけない喜びだったことだろう。

寂寞たる北邸涙を呑んで回る

斜陽落木余愛あり

音容明日何れの処を尋ねん

半ばは是れ煙りと成り半ばは是れ灰となる

想起する去年我が兆民先生の遺骸を城北落合の村に送りて茶毘に付すや、時正に初冬、一望曠野、風勁く草枯れ、満自惨凄として萬感智に湛え、去らんと欲して去らず、悄然車に信せて還る。

これは町民の死後、秋水が上梓した兆民の伝記「兆民先生」の冒頭部分で、兆民の茶毘の送りを記した一文だが、測々として胸に迫ってくる。

高名な西洋史学家河野健二（故人）は、「兆民は近代日本がもったたいぐいまれな民主主義者」と評している。

兆民は龍馬に萌芽し、龍馬が切り拓いた民主主義思想を戦闘的に発展させたものだ。

※ この「兆民小伝」は、今年一月の秋水研究会定例会での報告「近代民主思想の系譜―龍馬、兆民、秋水―」の一部を抄録、加筆したものである。

志国高知幕末維新博

今年大政奉還150年、来年明治維新150年に合わせて、高知県では「志国高知幕末維新博」が3月から向こう2年間開かれています。

県下20のサテライト会場の一つ四万十市立中央公民館「しまんと特別企画展」では、幸徳秋水ら地元出身「偉人」14人を紹介。

秋水コーナーには、普段は郷土資料館（リニューアル工事で現在閉館中）に展示している、秋水20歳の時描いた絵馬（不破八幡宮奉納）と、幼き頃の師木戸明（儒学者）あて葉書を移して展示しています。

他には、安岡良亮（秋水母従兄、初代熊本県令）、佐竹音次郎（秋水と接触保育の父）、遠近鶴鳴（町人学者）、間崎滄浪（土佐勤王党）、木戸明らを展示。



秋水が描いた絵馬

西村ルイ（秋水最初妻） ゆかりの地 福島県安積開拓地訪問

田 中 全

西村ルイは明治十五年、福岡県八女郡黒木町（現八女市）の旧久留米藩士西村正綱の二女として生まれたが、同二十七年、父は一家を引き連れ福島県国営安積開拓地に移った。

私は昨年四月、黒木町を訪ねた。西村家は地元名門（地主、素封家）であった。それを誇示するような広い一族墓所に正綱夫婦は戻っていた。私は中村に帰った直後、ルイの孫女性二人を秋水墓参に迎えた。（前号で紹介）

西村正綱はなぜ福島に移ったのか、黒木では謎が残った。私は福島に行ってみたいと思いい、今年一月末、東京正春寺での大逆事件犠牲者追悼集會に参加した翌日、郡山市郊外の旧安積開拓地に向かった。

東北新幹線で一時間半。駅から出ると、さすがに寒い。ブルブル。

まず、タクシーで開成山神宮へ。神宮は、安積開拓事業のシンボル、精神的拠り所として明治九年建立。すぐ近くの開成館（開拓資料館）、安積歴史博物館へも足を運んだ。

開拓事業は、当初福島県主導で着手されたが、明治十一年からは、大久保利通らの提唱で、土族授産のための大規模国営事業に拡大されてから、最初に入植したのが旧久留米藩士百五十六戸で、参加九藩中最大勢力。そのリーダーの一人が西村正綱妻千鶴の兄太田茂であった。

二日目は、久留米開墾報徳会会長の

中島武さんにご案内いただいた。報徳会は久留米入植者子孫の方々の集まりである。

中島さんの車で久留米から分祀した水天宮へ。境内にはたくさんの記念碑などが立っており、脇には久留米資料館もあった。

館内には、いろんな資料が展示保管されていた。開成館の展示よりも生々しい。詳細な年表、入植者名簿、歴代区長写真、当時の借金証書など。刀を鍬にかえ、慣れない農作業に苦しんだ久留米藩士のうめき声が聞こえてくるようだ。ここの地名も郡山市久留米。いまは住宅地だ。

久留米藩組は、その後二つに分裂。半数以上は北部（旧喜久田村対面原）に移動。太田茂とその兄榮、弟伝もこちらのほうに属していた。

北部にも同じ水天宮が、さらに金毘羅宮もあった。遠くに白く雪をかぶった安達太良山を望むところで、南部と違い、一面田畑が広がり、いかにも開拓地という雰囲気を残していた。

戸籍によれば、西村正綱一家は明治二十七年、この地に入り太田伝宅に同居した。



久留米（北部）開拓碑



太田榮・茂 兄弟墓

小泉三申（秋水友人）、岡崎てる（秋水従妹）が書き残しているところによれば、その二年後ぐらいにルイは東京の幸徳秋水と結婚したことになる。

しかし、今回、西村正綱の名前は、開拓地のどこにも見つけることができなかつた。入植者名簿にも、開拓記念碑に刻まれた名前にも。また、「開拓百年史」等の資料の中にも。

今回わかつたのは、久留米開墾事業はすでに明治二十四年終了していたこと。その頃は、生活苦の中、地元高利貸商人などから借金のかたに土地をとられるなどして、多くの開拓民が離散していた。そんな時期に、この地に新たに移住することは考えられないと、中島さんは強調された。

西村ルイは、生前、生まれ故郷の福島県黒木町の思い出話したが、安積のことはほとんど話さなかつたという。いい思い出はなかつたのであろう。そんな中、わずかに話したことの中に、

一家で開拓地に入るさい、荷車に載せて運んでいる家財道具が立派だったの、道々羨望の目で見られたということ、また父正綱は、酒好きで、開拓地でも玄関に酒を並べて飲んでいたということがある。

正綱は開拓農民としてではなく、名門ゆえに何等かの仕事（公職？）で招かれたのではないか。現に、正綱は視

学官（教育行政官）をしていたらしいという話が残っている。

しかし、今回、教育関係資料が残っているという安積歴史博物館に調査を依頼したが、追っかけ、そんな記録は見つからないという報告が届いた。さらに調べてくれるというが・・・

太田茂と榮の墓は今確認することができた。茂の子孫が東京にいたことがわかつた。茂には顕彰碑（率先碑）があり、十六年前、これを補修するさいその費用の大部分を正綱長男軍次郎（ルイの兄）の娘（黒木町）が提供したことも。しかし、榮の子孫は不明であり、伝については墓の所在すらわからない。

西村正綱は移住九年後没。長男軍次郎はその前後に東京へ出た。二人の墓は黒木町にある。

今回、秋水にルイを紹介したとされる中江兆民同門の友人森田基（画家）とはどんな人物で、西村家とどんなつながりがあったのかもわからないままである。

しかし、久留米藩入植地（北部）の比較的近いところに土佐藩入植地（廣谷原）があり、また太田榮がその後村長をつとめた旧多田野村にも土佐藩の別グループが入植していたという事実がわかつた。

ここらに秋水とルイをつなぐ糸があつたのではないかという思いを強くした。確証はないままだが・・・

二日間郡山に滞在し、東京に戻ってから、埼玉県の真野寿美子さん（秋水孫）を一年ぶりにお訪ねし、以上の報告をさせていただいた。

寿美子さんは、いちいちうなぎながら聞いてくださった。